

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会 | Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

「北海道熊研究会報」読者の皆様へお知らせ

2014年8月18日から連日13回にわたり、北海道新聞の夕刊紙面の、「私のなかの歴史」で、「ヒグマ研究45年」という題で、私(門崎允昭)が、私の「ヒグマについての考え、人と熊の共存策」等を口述、編集委員の「中尾吉清」さんが取材文章化し、掲載されました。その第10回目、8月27日(水曜日)掲載を、ここに再録しますので、ぜひ、お読み下さい。

3 6版

2014年(平成26年)8月28日

私のなかの歴史

アイヌ民族は「イヨマンテ」という、クマ送りの儀礼を営んできました。彼らの豊かな精神世界・宇宙観を物語り、クマと共存する英知が込められています。

世界には南米のメガネクマを含め7種類のクマがいますが、イヨマンテに類似のクマ信仰は北半球でのみ行われています。文献調査では65の民族で、対象のクマはほとんどがヒグマです。

一般的なクマ信仰は、狩猟した

動物学者

かどさき 門崎
まさあき 允昭さん

ヒグマ研究45年

⑩

個体を悼んで鎮魂する儀礼。アイヌ民族のイヨマンテは「神を行かせる」といった意味で、送り儀礼であるという点が特徴です。



大雪山系の登山道で、かゆいのか道標に背中をすりつけるクマ

アイヌ民族 共存する英知 信仰の中に

アイヌ民族は自然の物、人工物でも自然現象でも神の化身・所作の結果と考え、壊れた道具や狩りの獲物などをすべて神の元に返す送り儀礼を日常的に営んでいます。イヨマンテも、そうした送る儀礼の一環であった、と私は解釈しています。

いつごろ始まったのか不明ですが、江戸時代中期の1710年、幕府巡検使に加わっていた松宮観山が、蝦夷通詞(アイヌ語通訳)から聞き取った「蝦夷談筆記」に詳細な式次第が記録されています。大雪山系の登山道で、かゆいのか道標に背中をこすりつけるクマ

す。明治時代とほぼ同じ。ですから、18世紀初頭に儀礼として完成されていた、と考えられます。

冬ごもりの穴から連れ帰った子グマに女性が乳を与えるなどして育てる。11月から翌年1月に大勢を招いて、成長したクマを神の国に送り返す。丸太で絞め殺すのが、樺太も含めたアイヌ民族の特徴。宣教師でアイヌ文化研究者のジョン・パチェラーは「クマに悲惨な声(悲鳴)を上げさせないため」としています。同感ですね。愛情を込めて育てたクマの死を嘆きながら、団子や酒などをたくさん供え神の国への土産にしてもらう。神の国に帰ったクマは人間

の世界での歓待を報告するので、再び神の国からクマが土産を持ってやってくる、と考えられています。

以上は「飼育クマ儀礼」ですが、狩猟先で、あるいは狩猟先から頭と毛皮を持ち帰って営む送り儀礼もあります。

江戸幕府、明治政府は「残酷だ」と禁じました。クマを神として敬う人々に、その批判は的外れです。異文化を認めず、同化を迫る、間違った政策でした。イヨマンテは可能な限り古式にのっとって定期的に催すべき文化だと考えます。アイヌ民族の人々だけでなく和人も見学したりテレビで放映できないでしょうか。

和人、アイヌ民族がそれぞれの文化を尊重して交流し共生する。あらゆる生命を大事にしよう、とイヨマンテを通じて学ぶことができると思います。

アイヌ民族は、クマを神様と考えながらも、出合わないよう気を付け、遭遇し襲われたときには戦うためのタシロ(山刀)を携行するなど北海道の大地でクマと生きる英知を持っていました。

これまでもアイヌ文化振興・研究推進機構の依頼でアイヌ民族とヒグマをテーマに講演してきましたが、本年度から3年間、同機構のアドバイザーを務めます。多くの皆さんに、北海道のヒグマ、アイヌ文化の素晴らしさを伝えたいと考えています。

(聞き手・中尾吉清)

<2歳未満の熊は人を襲わない>

動物の行動には(熊も人間も)、必ず目的と理由があります。熊の出没に対しては、それを見極める事が大事です。2歳未満(体長1.3m以下、足幅13cm以下の熊)が、人を襲った事例は、一度もありません。札幌の住宅地での出没個体は、皆2歳未満の若熊であり、騒ぐ必要は無い事を、識って対応して戴きたい。ハンターの出動は不要。行政に関与している研究者は、もっと、熊の生態を勉強すべきである。